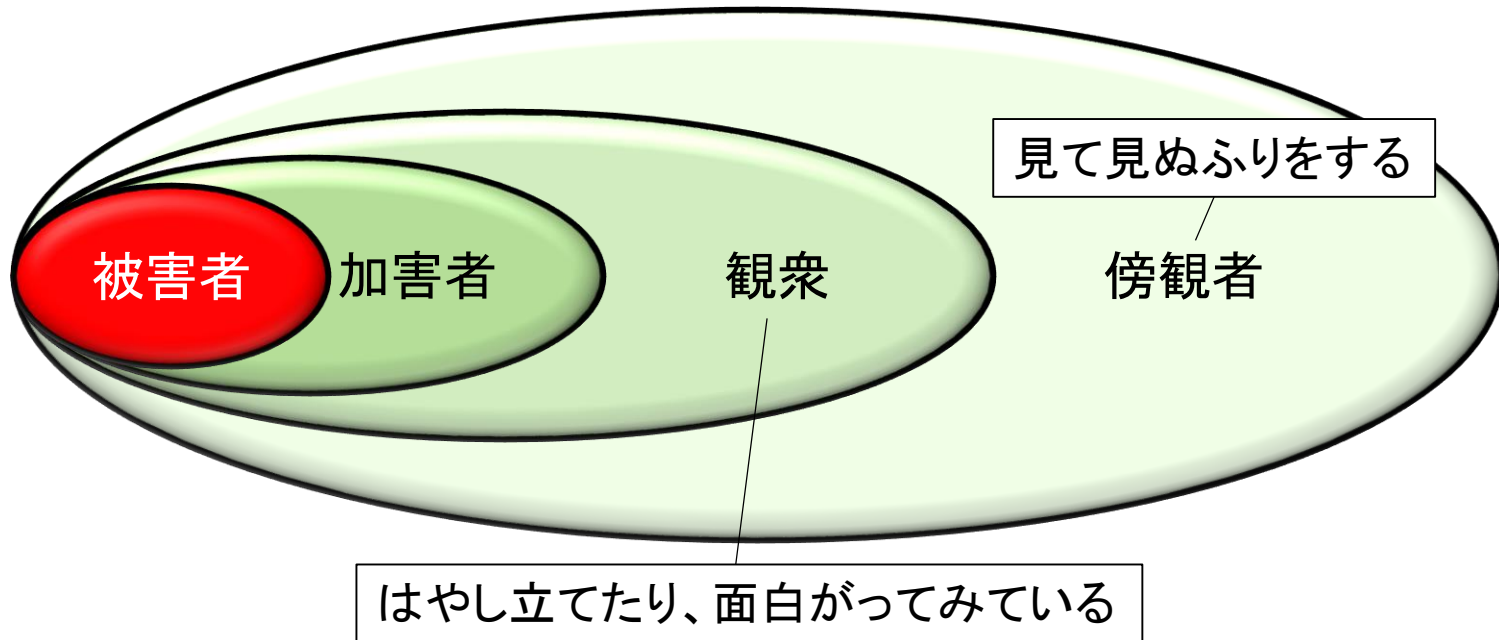


3 いじめ対応事例と未然防止

いじめの四層構造 (1997森田洋司 調査)



(1) いじめ対応の事例



組織が機能している事例

「いじめ対策・不登校児童生徒支援ガイド」(平成30年3月大分県教育委員会)を活用し、チェックを行っている事例

- 毎学期はじめの職員会議で、全職員に「いじめ対策・不登校児童生徒支援ガイド」を持参させ、チェックページで確認を行い、意識付けを行っている。
- 先入観を払拭することで、「いじめ見逃しゼロ」に結びついている。
- 気になる生徒状況を、全教職員で共有できることから、あたたかく生徒を見守ることができている。

不適切な事例

- 金曜日放課後、クラス担任が情報提供生徒と面談。被害生徒がいじめられているという情報を得た。
- 翌週の月曜日、被害生徒から聴き取りいじめの内容を確認。被害生徒は「**誰にも言わないでください**」と要望。
- クラス担任独自の判断で、ホームルームで人を思いやる気持ちについて担任が講話。
- 10日経過した後から被害生徒が登校できなくなる。理由は以前にも増していじめが激しくなったとのこと。
- 保護者が、管理職に「子どもが、いじめられているのに、学校はどうなっているんだ!」と言ってきたが、何の事案か知らなかった。
- ようやく、学校いじめ対策委員会で対応することとなった。

担任による事案の抱え込み

担任は、「いじめがある」情報を把握できているが、児童生徒から「誰にも言わないでください」「先生だけに話します」と約束を迫られる場合がある。

なぜ、学校いじめ対策委員会への報告が遅くなってしまったか

考えられる要因

- ① 約束や信頼関係を失いたくないことから、その処理をどのようにすればよいか躊躇してしまっただから
- ② 担任自身が、経験則でクラス集団への働きかけにより、解決を図ろうとするから
- ③ 担任自身が、いじめの確証を得てから報告しようと様々なアプローチを繰り返していく内に、報告するタイミングが遅くなってしまうから

では、どのような対応が考えられるのか

- 個人で判断せず、管理職や学年主任に、被害児童生徒からいじめの事を「誰にも言わないで欲しい」と言われていることを報告・連絡・相談する。
- つらい気持ちを話してくれたことに、「よく話してくれたね。ありがとう」など肯定的表現から導入し、「私だけでなく、他の先生たちみんなで、どうしたらよいかを一緒に考えさせてくれないかな？」と自分一人では良い知恵が浮かばないことや、行動できないことから、他者に相談することについて、丁寧に説明することが大事である。
- あなたを守ることに必ずつながることを道筋や展望を示しながら、安心感を持たせて、説得ではなく説明を行う。

(2) 児童生徒の声より

チェック☑

- いじめを訴えた時に、みんながいる前で「●●職員室に来なさい」と言われると嫌だ。
- いじめが発覚した時、クラスみんなの前で、「クラスでいじめがあった」なんて言わないで欲しい。
- 呼び出す時に、みんなにバレないようにして欲しい。
- 親に心配かけたくない。
- 休み時間に先生達に見て欲しい。隙間時間が怖い。
- 相談する事は、とても勇気のいることと知って欲しい。
- いじめられていると、まわりの人に知られたくない。
- 「大丈夫」と聞かれたら、「大丈夫」って答えてしまう。
- 「笑っているから」大丈夫と思わないで。



(3) いじめの未然防止

ポイント いじめ対策の基本は、児童生徒全員を対象とした未然防止が重要

- ◆ 早期発見・早期対応の取組や、加害者・被害者を特定したり予見したりしようとする取組の限界を理解し、未然防止に取り組む。

いじめを減らしていく上で成果を上げているのが、

「いじめを生まない」という未然防止の発想に立った取組

いじめが起きにくい学校風土・学級風土

多くの児童生徒がいじめの被害のみならず、加害にも巻き込まれている事実¹に立ち、些細な行為が深刻ないじめへの簡単に燃え広がらない潤いに満ちた風土をつくりだす「居場所づくり」の発想の取組



- 「児童生徒が安心できる」、「自己存在感や充実感を感じられる」、そんな場所を提供できる授業づくりや集団づくり

いじめに向かわない児童生徒

多くの児童生徒がいじめ加害を行った体験があるという事実²に立ち、児童生徒ひとりひとりが「いじめなんて、くだらないよね」と言えるように育つことを促す「絆づくり」の発想の取組



- 主体的に取り組む共同的な活動を通して、他者から認められ、他者の役に立っているという「自己有用感」を児童生徒が感じ取れる絆づくり

(4) 人間関係づくりプログラムの普及啓発

児童生徒同士の良好な人間関係を構築し、いじめ・不登校をうまない魅力ある学校づくりに向けた取組の推進

短時間・継続的に実施可能な人間関係づくりプログラムの推進

人間関係づくりプログラムとは

ペアやグループでの話し合いを通して、他者理解や自己理解を促し、自尊感情を高めるための構成的グループエンカウンターや人と関わる力を育むソーシャルスキルトレーニングを集中的にグループで行う活動



現状

- 児童生徒の良好な人間関係を築く取組が不十分
- いじめの認知件数の増加、不登校出現率の増加
- 大分県版「人間関係づくりプログラム」(小・中・高校編)は策定されているものの、全教職員に普及されていない

具体的取組

- 短時間・継続的(10分間・週1回程度)に実施可能な人間関係づくりプログラムの推進
- 人間関係づくりプログラム実践ガイドを全公立学校へ配布

期待される効果

- ① 魅力ある学校づくりの促進
- ② いじめの認知力の向上や早期解決、新規の不登校出現数の減少
- ③ 教職員の学級経営力の向上

令和元年度

調査研究指定校 小中4校で実施
(県教育センター)

令和2年度

小・中学校
地域児童生徒支援コーディネーター配置校
22校で実施

高等学校
実践研究モデル指定校4校で実施

構成的グループ・エンカウンター

- エンカウンターとは、「心と心のふれあい」で本音の交流という意味。
- エクササイズを通して人間関係を円滑にすることを目的とする体験学習の一つであることから「人間関係づくり体験学習」とも言われている。
- 各種エクササイズを行いながら心と心のふれあいを深め、自己の成長を図ることをねらいとしている。

互いの良さを認めあう活動
自己理解・他者理解
所属感の高まり

ソーシャルスキル・トレーニング

- 対人関係を円滑に運ぶための知識とそれに裏打ちされた具体的な技術やコツを身に付けるためのトレーニング。
- 社会生活上の望ましい思考・判断や言動の仕方を習得するため、主に、基本的な生活習慣に関するもの（日常生活スキルトレーニング）と、対人コミュニケーションに関するもの（対人関係スキルトレーニング）とで構成される。

傾聴スキル向上
学級での人間関係づくりのスキル向上

調査研究校での児童生徒や 教職員の声



児童生徒の声

日頃あまり話さない友だちと話すことができ、相手の知らない部分を知ることができた。

仲良しでない人とのグループづくりへの抵抗が減った。普段目立たない児童生徒が表に出ることもあった。

教職員の声

